

諸行無常

比丘①たちよ、身は( )1②なのだ。身を生ぜしめた因と縁③もまた無常なのだ。無常な因と縁とによって生じた身が、どうして常住④でありえよう。この事実は、心について言っても同じである。比丘たちよ、すでに教えを聞いた聖弟子たちは、このような考えをもって身を厭い離れ、心を厭い離れるのである。身心を厭い離れることによって、( )2を捨て去ることができ、執着を去ることによって( )3することができる。(「雑阿含経」⑤)

注①僧、女性は比丘尼(びくに)。

②諸行無常とは、万物はすべて一瞬もとどまることなく変化し、生成消滅することをいう。行とはこの世界にあるもの、無常とは変化し亡び去ること。

③因とは直接的原因、縁とは間接的原因。たとえば、芽が出るためには種子が必要である。この種子が因、水・空気・熟・光・土壌などが縁にあたる。④永遠。

⑤最も古い漢訳経典は阿含(仏陀の説いた聖教)経である。漢訳され長阿含経、中阿含経、雑阿含経、増一阿含経からなる。

四 諦

なんじらよ問くがよい。ここに四つの真理がある。苦の真理(苦諦)、苦の集(おこり)の真理(集諦じったい)、苦の滅の真理(滅諦)、苦の滅への道の真理(道諦)がそれである。

苦の真理とは何であろうか。( )4は苦である。老は苦である。病は苦である。死は苦である。愛するものと別れるのも苦である。憎むものと会うのも苦である。求めて得られないのも苦である。これが苦の真理である。

苦の集の真理とは何であろうか。充足と貪欲を伴い、いたるところに満足を求める心、すなわら渴愛こそは、( )5①をもたらし、苦の起こり来たるところである。これに欲の愛②と有の愛③と無有の愛④とがある。これが苦の集の真理である。

苦の滅の真理とは何であろうか。この渴愛を、あますところなく捨て去り、離れ去り、解脱して執着することがなければ、また苦の起こり未たることもない。これを苦の滅の真理とする。

苦の滅に至る道の真理とは何であろうか。それは( )6であって、これが苦の滅に至る道の真理である。

このように私は、いまだかつて聞いたことのない真理によって、目を開き、知を発し、明を生じ、( )7に至ったのである。されば私はみずから無上の正覚をわが身に実現することをえたというのである。(「雑阿含経」)

注①さまざまな迷いの世界を、次から次へと生まれては死に、死んでは生まれかわるというようにへめぐって、とどまることのないこと。

②性欲を代表とする自己延長の欲望をさす。

③食欲を代表とする自己保存の欲求④名誉や権勢をあこがれる欲望。

八正道

なんじらは、まさに知るべきである。世には二つの極端がある。出家の行者はそれを学んではならぬ。二つの極端とは何であろうか。一つは、もろもろの( )8に愛着することである。それは卑しく、凡夫のわざであって聖ではない。益するところではない。二つには、みずから苦しめることである。それは苦であって、聖ではない。益するところがない。私はこの二つの極端を捨てて、( )9をとる。それは目を開き、知を発し、寂静①をえしめ、覚悟②を与え、正覚③に至らしめ、( )10④におもむかしめる。すなわち、正見、正思、正語、正業、正命、正精進、正念、正定⑤の八つの正しい道がそれである。

(「中阿含経」)

注①迷いを去り、苦しみをはなれて心が平静なこと ②迷いを去り道理を悟ること ③いっさいの真理を正しく悟ること ④吹き消すこと、つまり煩惱のほのおを吹き消して心が平静となり、何ものにもとらわれない絶対自由の境地をいう。

⑤正見は正しい人生観・世界観をもつこと。正思は、正しい考え方をすること。正語は正しいことばを使い、うそ・悪口・むだ口をいわないこと。正業は、行いを正しくすること。正命は、生活を正しくすること。正精進は、正しく努力すること。正命は、正見をつねに頭にとどめておいて自覚を夫わないこと。正定は、以上を総合して正しく精神を統一集中すること。

怨みを捨てよ

「われはののしられた、われはきずつけられた、われはやぶれた、われは強奪された」という思いをいただいている人には、怨みのしずまることがない。「われはののしられた、われはきずつけられた、われは強奪された」という思いをいだかない人には、怨みがしずまる。およそこの世において、怨みに報いるに( )11をもってしては、怨みのやむときはない。( )12を捨ててこそやむのである。これは不滅の真理である。

(「法句経」)

慈 悲

あたかも、( )13が自分の独り子を身命を賭してもまもるように、いっさいの生きとし生けるものに対しても、無量の慈しみのこころを起すべし。また全世界に対しても無量の慈しみのこころを起すべし。上に下にまた横に、すべてのものにむかって、邪魔をすることなく、怨みをいただくことなく、敵意をもつことなく、( )14を行うべし。立ちつつもあゆみつつも坐しつつも臥しつつも、眠らないでいるかぎり、このいつくしみの心づかいをしっかりとめて。この世では、この状態を崇高な境地とよぶ。

(「中阿含経」)

- ・生 ・母 ・欲 ・中道 ・怨み(2) ・無常 ・輪廻 ・慈悲 ・執着 ・涅槃 ・正覚  
・解脱 ・八つの正しい道